深夜螢　鈴木金太郎

涼とる人影絶えぬ月も落ちぬ
柳がくれに螢三つ四つ

長野盲人學校生徒の俳句第一回の吟　長野　飯島八千溪

秋

美しき庭の亂れや秋の風　酒井
大木の吹き倒されし野分哉　同
故郷を物思ふ夜や雁の聲　同
髪の毛のもつれを吹くや秋の風　同
此松に又來てとまれ秋の蟬　宮島
谷あひや紅葉の中を秋の水　同
朝夕は袷纏ほしき秋の風　同
そよ〳〵と芒にさはる秋の風　同

しんかんと獨の我に秋の蟬　宮嶋
女郎花戀に咲くべき名なりけり　駒村

説林

母と教育

齋藤鹿三郎

昔者、人あり始めて愛子をあぐるや、如何にしてその子を教育すべきかを知らんが爲めに、幾多の教育書を繙きたるが、讀破數卷にして「我はさとれり、我は猶善くならざるべからず」と獨り言をいふた。

これは、蓋し、その慈愛深き我が子をして、善良有用なる人物と爲さんには、己れ先づ善良有用の人物となりて、これを指導するにあらざるよりは、到底、その子の完美なる教育を爲し得べからざるものなりとの理由に、深く感激したのである。

殊に、家庭の教育にありては、兒童は主として父母の性格の感化によるものにして、世の諺に親の行は總てその子に映るといへるは、實にこの間の消息を穿ち得たる言である、これにつけても兒童を育てる上に就ては、世の親たるものは、餘程精細なる注意をはらはなければならぬと思ふ

佛國の教育家コンドルセー氏は、人の母たるものは、その子の自然的教育者なりと、いはれたるが實に兒童の教育に對して、婦人は最も親密にして、且つ最も重要なる地位にあるものであるといはなければならない。

されば、この母ありて、この子ありとは世人の常によく口にする所なるが、實にその母たる人の品格が氣高くして、德操も堅く學識も亦深きに至りては、その感化著しく、兒童の心に浸みわたりて、能く偉大なる人物をその膝下に出すといふことは、古今決して珍しからざることである。

これを以て世の母たる人にして、深くこの點に感發し、子女教育の爲めに、苦心慘憺して、我が身の修養を務めその子故に迷ふ親心は人の得てたやすく察すべからざる程である、されば孟母斷機の類はいはずとも日常卑近の細行にいたるまで、心ある母親の心づくしはまた一通りならぬものである。

嘗て雷鳴をいたく恐れし婦人が、かゝる怯懦の

性癖ありては、我が子の氣力など鍛へらるべくもあらずとて、これを矯正せんが爲めに雷鳴の日、殊更庭前に端坐したといふ美談もある。また己れ徒に逸樂に耽りて、唯その子の勤學を責むるは、甚だ非教育的の仕打なりとて、富貴顯榮の身に處しながら、自ら一業をとりて、夙に起き、夜はにいねて、その子の鑑戒に供し、さては兒童の教育に就いては、通常の準備より辨當の用意にいたるまで、一切婢僕などの手に委ねずして、自らその勞に當りて樂みし母親もある。

世界の英傑といはれたるナポレオンが嘗て、一國兵士の强弱を知らんと欲せば、須らく、その國婦人の健否を見るべしといはれたが、殊に子女の教育の結果に對しては、母の賢否如何に歸することは、猶一層鮮明なる分界を示すものであると思ふ。

されば吾人は、婦人を以て人類世界の花であると思ふのである。そうして將來如何なる果實が、この花によりて結ばるゝかも亦豫めトせらるゝものであると思ふ。これを思へば世の婦人は、その子女教育の重任に對して、最も愼重の態度をとり奮勵せられなければならぬと信ずるのである。何となれば、婦人の胎內より生れ出で、只管婦人の手によりて、教養せらるゝ兒童は實に婦人によりて、結ばるゝ果實にして、しかもこれ等の兒童が將來世に立つに及んではその人となりの、如何に關係し小にしては一身一家の幸不幸、大にしては國家興廢の依て岐るゝところなるからである。

これを思へば天然の教育たる重任を負へる人の母たるものは自ら奮ふて我が身の修養研鑽に意を

用ゐて明確なる知見、圓滿なる感情、堅固なる意思を有して將來の國家を組織する兒童の爲めに確信あり、熱誠なる所の教育を施さんことは、吾人の實に切望に堪へざるところである。

寄書

愉快なる家庭

東京　秋影生

家庭の愉快は何邊より來るかと題して、神門女史の擧げられたる三要素も然るとながら余は更に(一)家族の趣味好尚の一致(二)餘裕ある生活の二要素を認めむと欲す。(一)令夫れ良人は園藝を好みて音樂の趣味を解せず、妻は音樂を喜びて園藝に興趣を牽かず、彼の樂しむ所は此の苦しむ所、此の喜ぶ所は彼の厭ふ所畢竟趣味好尚の一致を缺く時は感情の裕和をみると能はず、往々にして衝突を來すに至る、それ感情の衝突ほど不愉快を釀すものはなく家庭の平和屢之がために破る。而してこれもと些々たる趣味の相異よりして來ると多き也。若し一人の樂しむ所は即ち一家の樂しむ所、擧族怡和して藹々たるを得ば、家庭は長しへに愉快ならむ。(二)かの山に登るもの、嶮峻を攀ぢ、荊棘を開き、喘々焉として疲倦困倒せむとす、偶〻夷に就て憩ひ、眺瞰を試むれば、眼界遠く開けて田疇居落相連る所、炊煙縷の如く揚り、一川裕々銀蛇を其間に走らし、時に白帆點々上下するを見る、是に於て心神頓に濶然、脚力新に加はり疲倦を忘れて頂を極むるを得べし。生活に餘裕を